『太平広記』の諸本について

富永一登

近年、中国の小説研究の隆盛にともない、唐・五代までの古小説の輯本である『太平広記』に関する文献が陸続と出版されている。

李昉の「上表文」及び『宋会要』（南宋・王応麟〈一二二三～一二九六〉撰『玉海』巻五四引）によれば、『太平広記』は、太平興国二年（九七七）三月、太宗の命を受けて李昉等が編纂を開始、翌太平興国三年（九七八）八月十三日に上表、八月二十五日に史館に送付、太平興国六年（九八一）正月に勅命により雕印された。ところが、学者の急務とする書ではないという意見によって、版木のまま収蔵されてしまい頒布されなかったといわれている。その頒布されなかったという説は、『玉海』巻五四の注記に、「『広記』鏤本頒天下、言者以為非学者所急、収墨板蔵太清楼。」とあることによる。[1] しかし、北宋の文人には『太平広記』の文章を引用している者がある。そもそも、『玉海』の注記は神仙部から雑録部まで九十二部ある『太平広記』の内容を「五十九部。天部至百卉。[2]」と記し、太平興国三年八月に完成し六年正月には雕印されているのに、「八年十二月庚子成書」と注するなど、[3] 全く理解に苦しむ点が見られ、信用し難いところがある。

そこで本稿では、宋本『太平広記』の存在の可能性を考察し、併せて現行『太平広記』諸本の系統と日本における所蔵状況、及び『太平広記』に関する諸論考を整理しておくことにする。

一　宋本『太平広記』の存在の可能性

蘇軾（一〇三六～一一〇一）の『東坡題跋』巻三（孔凡礼点校『蘇軾文集』〈北京中華書局、一九八三年〉巻六八）の「書鬼仙詩」に八首の詩を挙げた後に、次のように記す。

元祐三年二月二十一日夜、与魯直・寿朋・天啓、会于伯時斎舎。此一巻、皆仙鬼作、或夢中所作也。又記、『太平広記』中、有人為鬼物所引入墟墓、皆華屋洞戸。忽為劫墓者所驚、出、遂失所見。但云、「芫花半落、松風晩清。」吾毎愛此両句。故附之書末。（元祐三年二月二十一日夜、魯直・寿朋・天啓と、伯時の斎舎に会す。此の一巻は、皆な仙鬼の作、或いは夢中に作る所なり。又た記す、『太平広記』中に、人有り鬼物の引く所と為りて墟墓に入るに、皆な華屋洞戸なり。忽ち墓を劫かす者の驚かす所と為りて、出で、遂に見る所を失ふ。但だ云ふ、「芫花半ば落ち、松風晩に清し」と。吾毎に此の両句を愛す。故に之を書末に附す。）

元祐三年（一〇八八）は、蘇軾が知貢挙となった五十三歳の時である。その二月二十一日夜[4]に、黄庭堅（字、魯直。一〇四五～一一〇五）・寿朋（伝未詳）・蔡肇（字、天啓。？～一一一九）の三人と、李公麟（字、伯時。一〇四九～一一〇六）の書斎に集まり、幽霊や神仙の詩一巻を編んだという。そして、蘇軾は『太平広記』の中の「芫花半ば落ち、松風晩に清し」という二句が好きだと付記している。

この二句は、『太平広記』巻三三九（鬼二四）「崔書生」（出『博物志』[5]）に見える。

博陵（河北省定州市）の崔書生は、貞元年間（七八五～八〇五）清明節で長安から故郷の渭南（陝西省渭南市）に帰る途中、一人の美しい娘を見かける。娘が道に迷っているようだったので、崔は馬を貸し与えその後を追った。林の中の、桃李の芳香が漂う立派な屋敷に至り、母親から娘を救ってくれたお礼を述べられ、ご馳走にあずかる。娘は名を玉姨といい、崔は彼女と懇ろな仲となり、この上ない喜びを尽くす。ある日突然、賊が来たといって、崔は玉姨

に門から押し出される。崔が門を出ると、玉姨の姿は見えず、自分は穴の中にいて、「唯見芫花半落、松風晩清、黄萼紫英、草露沾衣而已。」（唯見る、芫花半ば落ち、松風晩に清く、黄萼紫英、草露衣を沾すのみを。）という状況だった。そこは、北周・趙王（文帝の子、宇文招）の娘の墓中であり、崔の下僕が主人の後を追って、墓を掘り起こしていたのを、墓中の人は賊が来たと言ったのであった。崔は事に感じ、墓を元通りに埋めさせた。

蘇軾が好みの句として引用したのは、原文を挙げた箇所の二句である。[6] 蘇軾が『太平広記』を読んで、その一節を印象深いものとして記憶していたことがわかる。また、先に引く八首の詩にも『太平広記』に見えるものがある。

○忽然湖上片雲飛、不覚中流雨湿衣。折得荷花渾忘却、空将荷葉蓋頭帰。（忽然として湖上　片雲飛び、覚えず中流雨　衣を湿す。荷花を折り得たるも渾て忘却し、空しく荷葉を将つて頭を蓋ひて帰る。）

○浦口潮来初渺漫、蓮舟溶漾採花難。芳心不愜空帰去、会待潮平更折看。（浦口　潮来り初め渺漫たり、蓮舟溶漾として花を採ること難し。芳心愜はず空しく帰り去り、会ず潮の平かなるを待ちて更に折りて看ん。）[7]

この二首とも、『太平広記』巻三〇五（神一五）「王法智」（出『広異記』）にある神の作った詩である。[8]

○爺嬢送我青楓根、不記青楓幾回落。当時手刺衣上花、今日為灰不堪着。（爺嬢　我を送る青楓の根、記せず青楓幾回か落つるを。当時手づから刺す衣上の花、今日　灰と為りて着るに堪えず。）

『太平広記』巻三四五（鬼三〇）「劉方玄」（出『博異記』）にある幽鬼の作った詩である。[9]

○卜得上峡日、秋江風浪多。巴陵一夜雨、腸断木蘭歌。（卜し得たり上峡の日、秋江風浪多し。巴陵一夜の雨、腸は断つ木蘭の歌。）

『太平広記』巻三四六（鬼三一）「臧夏」（出『河東記』）にある幽鬼の作った詩である。[10]

○寒草白露裏、乱山明月中。是夕苦吟罷、寒燭与君同。（寒草白露の裏、乱山明月の中。是の夕　苦吟罷み、寒燭君と同にせん。）

『太平広記』巻三四四（鬼二九）「祖價」（出『会昌解頤録』）にある客死した幽鬼の作った詩である。[11]

このように八首中、五首が『太平広記』に収録する話にある詩である。且つ最後の詩の第一句「寒草白露裏」は、現行の『太平広記』では「白草寒路裏」に作るが、孫潜の手校によれば鈔宋本は「寒草白露裏」に作っていたという（厳一萍『太平広記校勘記』〈台湾芸文印書館、一九七〇年〉による）。蘇軾の記すものと同じである。蘇軾の見た宋本『太平広記』が存在した可能性が十分に考えられる。

なおこの他、『東坡題跋』には、夢中の詩や幽鬼の詩に関する記事もある。蘇軾は、「峡山寺」詩（清・王文誥輯註『蘇軾詩集』巻三八）に、

佳人剣翁孫、遊戯暫人間。忽憶嘯雲侶、賦詩留玉環。（佳人は剣翁の孫、遊戯して暫く人間にあり。忽ち憶ふ嘯雲の侶、詩を賦して玉環を留む。）

と、唐・裴鉶『伝奇』所収の袁氏（猿の化した女性）と孫恪の恋物語を詠み込むのをはじめ、『搜神記』『搜神後記』『漢武内伝』『続斉諧記』「枕中記」「南柯太守伝」「長恨歌伝」「鶯鶯伝」などかなりの六朝唐代の小説を読んでいたことが知られている。[12]これらが『太平広記』によるものかどうかは更に一段の検討が必要であるが、その可能性がないというわけではない。また、蘇軾の師欧陽脩も『新唐書』芸文志で小説家の内容を一変させたことをはじめ、小説を相当数読んでいたという。蘇軾と併せて、北宋の文人全般についての検討も当然必要になってくる。

もう一例、北宋の文人が『太平広記』を読んでいたという記事が、宋・袁文の『甕牖閒評』（聚珍版叢書所収）巻五に見られる。袁文は、唐・太宗が王羲之「蘭亭」の真跡を広州の僧侶から手に入れたことを記して、次のような引用を行う。

宋景文公『雞跖集』亦云、「余幼時読『太平広記』、見唐太宗遣蕭翼購蘭亭帖、蓋譎以出之。輒嘆息曰、蘭亭叙、若是貴耶。以太宗之賢、巍巍乎近世、所無奈何溺小嗜好而軽失信于天下也。……」（宋景文公の『雞跖集』に亦云

ふ、「余　幼時『太平広記』を読み、唐の太宗蕭翼を遣はして蘭亭帖を購はしむるに、蓋し譎りて以て之を出さしむるを見る。輒ち嘆息して曰く、蘭亭叙は、是の若く貴きか。太宗の賢を以て、近世に巍巍たらしめんとするも、小嗜好に溺れて軽しく信を天下に失ふを奈何ともする無き所なり。……」と。）

宋景文公がいう話は、確かに『太平広記』巻二〇八（書三）に、「購蘭亭序」（出『法書要録』）、「又」（出『紀聞』）と題して二話収められている。宋景文公、即ち宋祁（九九八～一〇六一）は、欧陽脩とともに『新唐書』を編纂した、北宋初期の文人であり、その彼が幼児の時に『太平広記』を読んでいたというのである。

更に、北宋・王堯臣等が慶歴元年（一〇四一）十二月[13]に奉った『崇文総目』類書類にも、「太平御覧一千巻　李昉等撰。広記五百巻　李昉等撰　〈原釈〉博採羣書、以類分門。」[14]と、『太平御覧』とともに記載されている。この当時、『太平広記』が存在していたことが書目によっても確認できる。

続いて南宋・元の書目等にも、次のような記載が見える。

○『郡斎読書志』晁公武（高宗の紹興二年〈一一三二〉進士）撰

［小説類］太平広記五百巻　右皇朝太平興国初、詔李昉等取古今小説編纂成書。同太平御覧上之。[15]

鹿革事類三十巻、鹿革文類三十巻　右節『太平広記』事実成一編、曰事類。詩文成一編、曰文類。蔡蕃晋如所撰。晋如博学通音律、能属文、与十父相友善。

北宋末には、蔡蕃（一〇六四～一一一一。字、晋如。）によって、『太平広記』の節録本が作られていたという。[16]

○『通志略』鄭樵（一一〇三～一一六二）撰

［芸文略　類書類下］太平御覧一千巻　太平興国中、詔李昉等十四人編集。八年書成、初名『太平総類』、後改曰『太平御覧』。蓋以年号命名。

又目録十巻

太平広記五百巻　李昉編。『御覧』之外、採其異而為『広記』。

［校讎略　泛釈無義論一篇］　『太平広記』者、乃『太平御覧』別出『広記』一書、専記異事。奈何「崇文之目」所説、不及此意、但以謂「博採羣書、以類分門。」凡是類書、皆可「博採羣書、以類分門。」不知『御覧』之与『広記』又何異。『崇文』所釈、大概如此。

これは先の『崇文総目』の「原釈」が『太平御覧』と『太平広記』の区別を明確にしていないと批判し、『太平広記』の内容を「専ら異事を記す」と規定したものである。

○『直斎書録解題』陳振孫（一一三四～一一三六に浙西提挙となる）撰

［小説家類］太平広記五百巻　太平興国二年、詔学士李昉、扈蒙等修『御覧』、又取野史伝記故事小説撰集。明年書成、名『太平広記』。

○『遂初堂書目』尤袤（一一二五～一一九四、高宗の紹興一八年〈一一四八〉進士）撰

［小説類］京本太平広記

「京本」と冠しているので、このころ『太平広記』が民間で出版されていたと考えられる。

○『老学菴筆記』巻八　陸游（一一二五～一二〇九）撰

陳師錫家享儀、謂冬至前一日為「冬住」、与歳除夜為対、蓋閩音也。予読『太平広記』、三百四十巻有盧頊伝云、「是夕、冬至除夜。」乃知唐人冬至前一日、亦謂之「除夜」。『詩』唐風、「日月其除。」除、音直慮反。則所謂「冬住」者、「冬除」也。陳氏伝其語、而失其字耳。

陸游は、『太平広記』巻三百四十（鬼二十五）「盧頊」（出『通幽録』）の一句を引いて、「冬至」の前日を「除夜」と称していた例証としている。これは、蘇軾の場合と同様に『太平広記』の文章に精通していないと思い浮かばないような引用である。

○『醉翁談録』羅燁撰[17]　［小説開闢］

夫小説者、雖為末学、尤務多聞。非庸常浅識之流、有博覧該通之理。幼習『太平広記』、長攻歴代史書。

唐代小説を粉本にした宋元の説話を収録し、説話人の語りの種本とされていたと言われる『醉翁談録』にも、幼時に『太平広記』を読んだことが記されている。

現行の諸本の中にも宋本の痕跡を留めるものがあり、後述する、孫潜、陳鱣がそれぞれ校訂に使用したという宋鈔本、宋刻本は、南宋期のものであろうと言われている。[18]

以上のような状況を踏まえて、中華書局本『太平広記』の「点校説明」（一九六一年六月十日）で汪紹楹氏は、『太平広記』の流伝について次のように記す。

雖然『太平広記』的印板在刻成後不久就被収蔵起来、但北宋末年已有蔡蕃節取它的資料、編成『鹿革事類』和『文類』各三十巻（拠衢本晁公武『郡斎読書志』十三著録）。可見北宋時並非絶無流伝、不過得見的人很少而已。又、今日所見各本中、「構」字還有改為「御名」之処、顕然是沿拠南宋刻本、避去宋高宗的名諱。尤袤『遂初堂書目』中也著録有『京本太平広記』、也是南宋有翻刻本的証拠。宋人文集的旧注本中也有引用到『太平広記』的、羅燁『醉翁談録』中指出当時説話人必須「幼習『太平広記』」。宋元的話本、雑劇、諸宮調等経常採用『太平広記』中所載的故事、至于明清的小説戯曲很多也是従『太平広記』中找到題材的。可見這部書対于後世文学的発展、曾起過很大的影響。

北宋の時代にも『太平広記』が読まれていたのは、蘇軾・宋祁などの記述からも明らかであり、そして南宋から元明にかけて小説や戯曲の粉本として唐代小説が大いに活用されるようになるとともに、『太平広記』の読者層広がり、翻刻本も出版されるに至ったと推測される。『太平広記』の流伝そのものが、宋代以降の中国文学に占める「小説」の地位の高まりを物語っているようで大変興味深いものがある。

二　現行の『太平広記』諸本

○談愷本

『太平広記』の北宋本はもちろん南宋本も現在には伝わっていない。現行の『太平広記』は、明・談愷が写本を手に入れ、秦次山・強綺塍・唐石東らと校訂を加えて、嘉靖四五年（一五六六）に刊行したものに始まる。汪紹楹氏（中華書局本「点校説明」）によれば、その談愷本にも次の三種類があるという。程毅中氏[19]と張国風氏[20]の指摘、及び中華書局本・許自昌本との比較も加えて異同の要点を記すと、次のようになる。

①汪氏［初印本］、程氏［甲本］、張氏［文６２３／５１４］）

・巻二六一（嗤鄙四）、巻二六二（嗤鄙五）、巻二六三（無賴一）、巻二六四（無賴二）の四巻を欠く。

・巻二六五（軽薄一）と巻二七〇（婦人一）の巻首に識語が無い。

・巻二六五（軽薄一）「劉祥」「劉孝綽」「許敬宗」「盈川令」「崔湜」「杜審言」「杜甫」「陳通方」「李賀」「李群玉」「温庭筠」「薛能」の十二篇は、文が②③と異なり、許刻本と同じ。

・巻二六五（軽薄一）②③に無い「汲師」「崔駢」「西川人」「河中幕客」「崔昭符」「温定」六篇が有り、許刻本と配列順は異なるが、文は同じ。

・巻二六九（酷暴三）「李紳」の文が②③と異なり、許刻本と同じ。

・巻二六九（酷暴三）②③に無い「胡瀾」「韋公幹」「趙思綰」「安道進」四篇が有り、文は許刻本と同じ。

・巻二七〇（婦人一）「洗氏」の文が②③と異なり、許刻本と同じ。（許刻本は「又」と題してこの本と同文のものも載せている。）

・巻二七〇（婦人一）「竇烈女」の文が②③と異なり、許刻本と同じ。（許刻本は「奉天竇氏二女」と題してこの

本と同文のものも載せている。）

・巻二七〇（婦人一）　②③に無い「李誕女」「義成妻」「魏知古妻」「侯四娘」「鄭路女」「鄒僕妻」「歌者婦」の七篇が有り、許刻本と配列順は異なるが、文は同じ。

②汪氏［後印本］、程氏［乙本］、張氏［１０１４６］

・巻二六一（嗤鄙四）、巻二六二（嗤鄙五）、巻二六三（無賴一）、巻二六四（無賴二）の四巻を欠く。

・巻二六五（軽薄一）と巻二七〇（婦人一）の巻首にそれぞれ隆慶元年（一五六七）の談愷の識語がある。

〈巻二六五巻首〉余聞蔵書家有宋刻蓋闕七巻云。其三巻余攷之得十之七、已付之梓。其四巻僅十之二三。博洽君子　其明以語我、庶幾為全書云。隆慶改元秋七月朔日十山談愷志。

〈巻二七〇巻首〉此巻宋板原闕。予攷家蔵諸書得十一人補之。其余闕文尚俟他日。十山談愷志。

・巻二六五（軽薄一）の目次「汲師」の下に「以下俱闕」の小字が有り、「汲師」「崔駢」「西川人」「河中幕客」「崔昭符」「温定」六篇の本文が無い。

・巻二六九（酷暴三）の目次「胡淵」の下に「以下俱闕文」の小字が有り、「胡淵」「韋公幹」「陳延美」「趙思綰」「安道進」の五篇の本文が無い（「陳延美」は①にも無い）。

・巻二七〇（婦人一）の目次「李誕女」の下に「以下俱闕」の小字が有り、「李誕女」「義成妻」「魏知古妻」「侯四娘」「鄭路女」「鄒僕妻」「歌者婦」の七篇の本文が無い。

③汪氏［最後印本］、程氏［丙本］、張氏［ＣＢＭ６５５―６５８］

・巻二六一（嗤鄙四）、巻二六二（嗤鄙五）、巻二六三（無賴一）、巻二六四（無賴二）の四巻が有る。

・巻二六五（軽薄一）、巻二六九（酷暴三）、巻二七〇（婦人一）は、②と同じ。

刊行順について、汪紹楹、程毅中の両氏は同じだが、張国風氏は、識語と収録作品の関係と、明・胡応麟『少室山

房筆叢』巻三五「二酉綴遺（上）」に

『広記』稍前、刻於錫山談中丞。談於此書、頗肆力讎校。又蔵書家有宋本、故雖間有舛訛、視『御覧』則天淵。第中闕「嗤鄙類」二巻・「無賴類」二巻・「軽薄類」一巻、而「酷暴」闕「胡瀏」等五事、「婦女」闕「李誕」等七事。談謂遍閲諸蔵書家悉然、疑宋世已亡。

とあるのが②と一致することから、汪氏の言う②が初印本で①が後印本だという。一方、汪紹楹氏は、嘉靖四五年刊行後の隆慶元年の識語の有無から、初印と後印の順を付したと思われる。巻二六五と巻二七〇に収録する①の本文（汪紹楹校注では、「不知拠何本補」という）は、後述の許刻本と同じであり、②と③の本文とは異なっていて、①と②③が別系統本であることは事実だが、初印、後印と順序づけるには更なる検討を要する。また、汪氏が③を祖本とすると言う許刻本が、巻二六五と巻二七〇に関しては①と同じだという点にも問題が残る。

張国風氏は、①②③以外に更にもう一本の談愷本の存在を指摘し、それは①②と③の間に位置づけられるものであろうという。

④張氏［12478］

・巻二六一～巻二六四が許刻本と同じで、巻二六五、巻二六九、巻二七〇の三巻は①と②の原板を合成したもの。

現在、①②④は北京図書館に有り、③は北京図書館にマイクロフィルムが、原本は台湾に有るという。

⑤［北平文友堂書坊依明談愷本影印］

民国二三年（一九三四）に北平文友堂書坊から影印出版された談愷本である。程毅中氏は、この文友堂影印本の底本は②［乙本］であろう（影印本の巻二六一～巻二六四は鈔補したもの）という。確かに文友堂影印本の巻二六一～巻二六四は、他と字体が違うが、文は許刻本と同じである。談愷本を底本とした中華書局本の巻二六一～巻二六四で原本と称するものは、文友堂影印本と同じであり、②との異同に関する校注が全く施されていないことから考えると、

文友堂影印本・中華書局本ともにその底本は、③［丙本］（汪氏［最後印本］）である可能性も考えられる。盧錦堂氏[21]によれば、蔵書印が傅増湘『蔵園羣書題記続集』巻三[22]に記す「明談愷刊本太平広記」と完全に一致するという。一九七〇年に芸文印書館が厳一萍の「校勘記」を付して影印出版したもの、一九七二年に中文出版社が縮刷影印出版した『校補本太平広記』[23]は、ともにこの文友堂影印本の影印である。

また、盧錦堂氏の論考によれば、台湾には、文友堂影印本の他に次の四種の談愷本があるという。

⑥［国立中央図書館所蔵刻本］

・巻二六一～巻二六四を欠き、巻二六五、巻二六九、巻二七〇に欠文有り。〈②に似る。〉

⑦［国立台湾大学研究図書館所蔵清孫潜校本］

・孫潜が宋鈔本をもとに談愷本を校訂したものである。厳一萍の「校勘記」（民国六〇年の序）が出版されている。

・巻四八七～巻五〇〇を欠く。孫潜以外の後補がある。

・巻二六一～巻二六四は鈔補されているが、巻二六五、巻二六九、巻二七〇の欠文は⑥と同じ。

厳一萍の「校勘記序」の考証によれば、孫潜は明の万暦四〇年（一六一二）前後に生まれ、清の康熙一七年（一六七八）ごろ卒し、宋鈔本による校訂は康熙七年（一六六八）に行われたという。『胡適手稿』第四集巻一に「孫潜校本的残本十六巻」がある。張国風「『太平広記』宋本原貌考」[24]でも論究されている。

⑧［前北平図書館所蔵刻本］

・巻二六一～巻二六四は鈔補ではなく、補刊されたものである。巻二六五、巻二六九、巻二七〇の欠文は⑥と同じ。〈③に似る。〉

⑨［中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館所蔵刻本］

・巻二六一～巻二六四は鈔補ではなく、補刊されたもので⑧と同じ。

・巻二六五と巻二七〇はそれぞれ両巻有り、一つの巻二六五と巻二七〇は⑥と同じで、もう一つは文字の異同があり、欠文も隆慶元年の識語もなく、許刻本・黄氏巾箱本とも違う。盧錦堂氏は、許刻本巻二七〇の巻首に「此巻宋板原闕、旧刻復贅一巻。今訂取其一、倘有謬盩、不妨更駁。」という注記があるところから、旧刻談愷本に重複して存在していたものの一本ではないかという。

⑩［四庫全書本］

『四庫全書総目提要』に、「此本為明嘉靖中右都御史談愷所刊、巻頁間有闕佚。」というが、張国風氏[25]が指摘するように、どの談愷本とも一致せず、許刻本・黄氏巾箱本などを参考にしたり、或いは独自の見解で随意に字句を改めたもののようである。その上、文淵閣本には談愷の識語が無く、文津閣本巻二七〇には識語があるなど、両本間でも異同が見られる。

談愷本を著録する書目には、『四庫全書総目提要』と傅増湘『蔵園羣書題記続集』以外に、清・丁丙『善本書室蔵書志』、清・周中孚『鄭堂読書記』、繆荃孫『藝風蔵書記』、邵懿辰撰『増訂四庫簡明目録標注』などがある。また、羅偉国・胡平編『古籍版本題記索引』（上海書店、一九九一年）によると、傅増湘『双鑑楼善本書目』、王遠孫『振綺堂書録』にも談愷本を著録するという。

談愷本に関しては、日本では、宮内庁書陵部に所蔵されている一本（②汪氏［後印本］、程氏［乙本］、張氏［１０１４６］と一致する。半葉十二行、一行二十二字、五十冊本）が確認できただけである。[26]

○許自昌本（許刻本）

巻頭の李昉の上表文の後に嘉靖四五年の談愷の自序はそのまま残しており、自身の序はないが、各巻の巻首に「明長洲許自昌玄祐甫校」の一行十字があり、半葉十二行、一行二十四字で、字体も談愷本とは異なり、新たに刻されたものであることがわかる。巻二七〇の巻首に「此巻宋板原闕、旧刻復贅一巻。今訂取其一、倘有謬盩、不妨更駁。」と

いう注記があり、許氏が見た談愷本が一種ではなかったことがわかる。

刊行年については、明・馮夢龍（一五七四～一六四五）評纂『太平広記鈔』[27]の「小引」に、

於是乎『御覧』書成、而筆其余為『広記』凡五百巻、以太平興国年間進呈、故冠以「太平」字。二書既進、俱命鏤板頒行。旋有言『広記』煩瑣、不切世用、復取板置閣。民間家蔵、率多繕写、以故流伝未広。至皇明文治大興、博雅輩出、稗官野史、悉傳梨登架、而此書独未授梓。間有印本、好事者用閩中活板、以故挂漏差錯、往往有之。万暦間、茂苑許氏始営剞劂、然既不求善本対校、復不集群書訂考、因訛襲陋、率爾災木、識者病焉。

とあるのによれば、万暦年間（一五七三～一六二〇）ということになる。なお、「茂苑の許氏始めて剞劂を営む」というからには、馮夢龍は談愷本を見ていなかったと思われる。

許刻本についての馮夢龍の評価は良くないが、それは談愷本を見ていないことによるものであり、許刻本自体は、程毅中氏も指摘するように、談愷本のより是なるものを採録しており、現存の『太平広記』諸本の中では貴重なものである。

許刻本にも数種類の刷りの異なる版本が存在する。たとえば、日本の内閣文庫に蔵する四本は、半葉の行数（十二行）、一行の字数（二十四字）、問題の巻二六一～巻二六四、巻二六五、巻二六九、巻二七〇などの体裁・字句ともに同じであるが、刷りと冊数（五十冊本が二本、五十二冊本、四十冊本）が違う。宮内庁書陵部書蔵本、静嘉堂文庫所蔵本、広島市立中央図書館浅野文庫所蔵本、京都大学人文科学研究所所蔵本も上記の体裁・字句は同じであるが、それぞれ五十二冊本、八十冊本、四十八冊本、六十四冊本と冊数が異なる。その他、目録調査によると、名古屋市立蓬左文庫所蔵本が二十冊本、新潟大学所蔵本が四十八冊本となっている。盧錦堂氏[28]によれば、台湾の国立中央図書館に四十冊本と五十二冊本の二本が、国立故宮博物院図書館に二十四冊本があるという。なお、国立故宮博物院蔵本については、阿部隆一氏の解題[29]がある。

書目では、清・楊守敬『日本訪書志』、邵懿辰撰・邵章続編『増訂四庫簡明目録標注』に著録されており、『増訂四庫簡明目録標注』の続編には、「談愷刻本次行有許自昌校刊字。有疑許刻即談愷者、但談刻大字、許刻小字、固自有別也。」と、談愷本との違いを説明している。

○［陳校本］

陳鱣（字は仲魚、号は簡荘。一七五二～一八一七）が残宋刻本をもとに許自昌本を校訂した宋本の名残を留める貴重なもので、北京図書館に所蔵する。中華書局本も校勘資料として使用しているが、張国風氏[30]が指摘するように、談愷本との異同の全てを記載しているわけではない。張国風氏に、「『太平広記』陳鱣校宋本異文輯選」（『北京図書館館刊』一九九五年三・四合刊）がある。解題は、清・呉寿暘『拜経楼蔵書題跋記』、傅増湘『蔵園羣書題記初集』[31]に詳しい。邵懿辰撰・邵章続編『増訂四庫簡明目録標注』にも著録する。

○明鈔本（明・呉県沈氏野竹斎鈔本）

明の沈与文が所蔵していた鈔本で、現在は北京図書館所蔵。中華書局本が校訂に使用している貴重な資料であるが、その全貌はまだ明らかにされていない。張国風氏[32]は、沈与文が嘉靖三〇年（一五五一）に八十歳ぐらいであったと推定できることから、この本は談愷本刊行以前のもので、宋本或いは元本を書き写したものであろうという。羅偉国・胡平編『古籍版本題記索引』（上海書店、一九九一年）によれば、莫伯驥『五十万巻楼羣書跋文』に「明抄本」が著録されている。

○明嘉靖常州府刻本

郭伯恭『宋四大書考』（国學小叢書、商務印書館、一九四〇年）に、「此本罕伝、未知所拠為何本。僅見周弘祖『古今書刻』列其目。」という。

○明隆慶活字本

郭伯恭『宋四大書考』に、「此本字跡模糊、幾於不能卒読、除後列掃葉山房本外、為『広記』版本之最劣者。北平図書館蔵有一部。」という。盧錦堂氏[33]が、「明活字本」として記す［前北平図書館蔵本］がこれであろう。盧氏は、もう一本［国立中央図書館蔵本］を「明活字本」として解題を施し、両者「字跡模糊、幾不能卒読、且出処甚多遺漏。」という。

○黄氏巾箱本

清の乾隆二〇年（一七五五）に、黄晟（暁峰）が談愷本を補訂して刊行した小字本で、巻首に乾隆一八年の黄氏の序が付されている。汪紹楹氏は、談愷本の③［最後印本］をもとに刊行されたものとする。この本が最も一般に流布した『太平広記』であり、漢籍を所蔵する図書館にはほとんど収蔵されており、一九六九年には新興書局から影印本が出版されている。また、いくつかの後刻本が刊行されている。郭伯恭『宋四大書考』の解題が詳しい。

○［嘉慶元年重鐫本］

嘉慶元年（一七九六）に重刻された黄氏巾箱本。静嘉堂文庫蔵。

○［蘇州聚文堂坊刻巾箱本］

嘉慶一一年（一八〇六）に黄氏巾箱本をもとに刻された本。郭伯恭『宋四大書考』には、「字跡不明、錯誤亦夥。」という。京都大学人文科学研究所蔵。

○［三讓睦記本］

道光二六年（一八四六）に黄氏巾箱本をもとに刻された本。一部に魯迅の『古小説鉤沈』と共通する字句がある。神戸大学文学部蔵。岑仲勉「跋歴史語言研究所所蔵明末談刻及道光三讓本太平広記」（中央研究院歴史語言研究所集刊第12本、一九四七年）に詳論がある。

○［筆記小説大観本］

民国一一年（一九二二）に、黄氏巾箱本をもとに上海文明書局が印行した本。郭伯恭『宋四大書考』に解題がある。一九六二年には新興書局から影印本が出版されている。

○掃葉山房石印本

上海掃葉山房が、民国一二年（一九二三）に印行した本。郭伯恭『宋四大書考』に、杜撰で『太平広記』版本中最も劣るものと酷評されている。

○点校本

一九五九年に、談愷本を底本として、明鈔本・陳校本・許刻本・黄氏巾箱本などとの校勘を施して、人民文学出版社（全五冊）から刊行された。それに若干の改訂を加えて、一九六一年に中華書局から出版された点校本新版（全十冊）が、現在『太平広記』の定本となっている。しかし、これも張国風氏が先に指摘していたように完全な校訂本ではない。

以上述べた『太平広記』諸本の解題でも明らかなように、『太平広記』の研究はまだ緒についたばかりであり、内容の考察はもちろん諸本の異同についても注意を払いつつ研究を進める必要がある。

（注）

1　『玉海』巻五四引には、「『会要』先是帝閲類書、門目紛雑、遂詔修此書。興国二年三月、詔昉等取野史小説、集為五百巻。〈（注記）五十九部。天部至百卉。〉三年八月、書成、号曰『太平広記』。〈（注記）二年三月戊寅所集。八年十二月庚子成書。〉六年、詔令鏤版。〈（注記）『広記』鏤本頒天下、言者以為非学者所急、収墨板蔵太清楼。〉」

と記す。

2 王国維「五代両宋監本考」（『王観堂先生全集』第十一冊）引『玉海』では「五十五部。天郡至百卉。」と記す。五十五部、天から百卉までというのは、『太平御覧』のことである。明代に『太平広記』を刊行した談愷の序にも「分五十五部」と記し、その後に「詔鏤板頒行、言者以『広記』為非後学所急、収板蔵太清楼。」と『玉海』注記とほぼ同文が書かれている。『玉海』の誤記をそのまま記すのとは、『太平広記』刊行の序文としてはあまりにもお粗末である。

3 王国維「五代両宋監本考」引にはこの注記は無い。

4 孔凡礼校注によれば、汲古閣刊『東坡題跋』では、「二十一」を「二十五」に作り、傅藻『東坡紀念録』の元祐三年の記事には「二月八日夜、会于伯時斎舎、書鬼仙詩」とあるという。

5 宋・陳元靚撰『歳時広記』巻一七にも『博物志』として引く。李剣国著『唐五代志怪伝奇叙録』（南開大学出版社、一九九三年）では、唐・林登撰『続博物志』の作品とする。唐・鄭還古（谷神子）撰『博異志』中の作ではないかと思われるが、『顧氏文房小説』を底本にする『博異志』（北京中華書局、一九八〇年）には収録されていない。

6 『全唐詩』巻八六六は、鬼の句としてこの二句を収録する。恐らく蘇軾のこの文をもとに詩句と判断したのであろう。

7 『広記』〈渺〉作〈淼〉、〈溶漾〉作〈揺颺〉、〈芳〉作〈春〉。

8 『全唐詩』巻八六四には、滕伝胤の「鄭鋒宅神詩」として収録する。

9 『全唐詩』巻八六六には、巴陵館鬼の「柱上詩」として収録する。

10 『広記』〈江〉作〈天〉、〈巴〉作〈江〉。『全唐詩』巻八六六には、安邑坊女の「幽魂詩」として収録する。

11 『全唐詩』巻八六六には、商山客死書生の「述懐」として収録する。

12 船津富彦「蘇東坡の小説観」（『東洋文学研究』九、一九六一年）参照。
13 『玉海』、『続資治通鑑長編』による。
14 清・銭侗輯釈本による。なお、明・談愷の序には、「『崇文総目』不及『広記』。」と記す。
15 『太平御覧』とともに呈上されたというのは誤りで、孫猛の『郡斎読書志校証』（上海古籍出版社、一九九〇年）に、「『御覧』於太平興国二年受詔、八年書成。『広記』於二年三月受詔、明年八月書成表進。則『広記』先成、不可謂〈同上之〉。」と指摘するとおりである。
16 「十父」については、孫猛の『郡斎読書志校証』によれば、晁公武の祖父、或いは叔父だという諸説があるが、いずれにしても公武の一、二世代前の北宋の人である。
17 中国には伝わらず、一九四〇年に日本で発見され、「観瀾閣蔵孤本宋槧酔翁談録」と称した。後、一九五七年に古典文学出版社から標点を付して『新編酔翁談録』として刊行、今それによる。内容の検討から宋代のものではなく、元刻本といわれている。
18 張国風「『太平広記』宋本原貌考」（『中華文史論叢』第五六輯、上海古籍出版社、一九九八年）による。
19 程毅中「『太平広記』的幾種版本」（『社会科学戦綫』一九八八年第三期）。
20 張国風「試論『太平広記』的版本演変」（『文献』一九九四年四期）。
21 盧錦堂「記所見明談愷刻本太平広記—兼及有関宋本流伝的一些線索—」（静宜文理学院中国古典小説研究中心編『中国古典小説研究専集』6　聯経出版事業公司、一九八三年）。
22 傅増湘撰『蔵園羣書題記』巻九（上海古籍出版社、一九八九年）。
23 この本は、「拠清・孫潜手校談本影印」と記すが、厳一萍の「校勘記」と比較すれば、孫潜手校本を影印したものでないことは明白である。なお且つ蔵書印を消し、字句を書き加えたり、許刻本・黄氏巾箱本を貼付したりし

た改竄本である。

24 『中華文史論叢』第五六輯（上海古籍出版社、一九九八年）。

25 「試論『太平広記』的版本演変」（『文献』一九九四年四期）。

26 『静嘉堂文庫漢籍分類目録』『京都大学人文科学研究所漢籍目録』に談愷本として著録されている本は、現物確認の結果、両者とも許自昌本であった。

27 『太平広記鈔』は、友人李長庚の序によれば、天啓六年（一六二六）に刊行されたようである。『太平広記』約七千話の中から、二千五百余話を抽出して配列を組み替えている。馮夢龍の小説観を考える上で貴重な資料となる。

28 前掲論文（注21）。

29 阿部隆一著『増訂中国訪書志』（汲古書院、一九八三年）。

30 前掲論文（注18）。

31 前掲書（注22）同。

32 前掲論文（注18）。

33 前掲論文（注21）。

［付記］本稿は、平成十一年度文部省科学研究費基盤研究（C）「中国古小説の類話集成に関する研究」による研究成果の一部である。

关于『太平广记』的各种版本

富永一登

近年来，伴随着中国小说研究的兴盛，至唐·五代的古代小说的编辑版本『太平广记』的有关文献相继得以了出版发行。可是，『太平广记』一书，其来历及版本尚有两个问题。一个是，“宋本”是否存在；一个是，各种版本间的词句上的异同。

基于此，本文根据北宋文人苏轼、宋祁的记述与各种书目，对『太平广记』一书是否存在的可能性作了考察，同时，整理了至今所刊行的『太平广记』的各种版本的系统和在日本所藏情况及其各种相关论文与考证。